

父母のこと

六十二歳

1957・8・25
抜粋

私の父、平井繁男^{しげお}は慶応三年二月三日、三重県津市において、七代、杵右衛門^{もくえもん}陳就^{ちんすけ}とその後妻和佐^{わさ}とのあいだに生まれました。この私の祖父陳就は、同人自筆の系図帳記事によると、元治元年三月大和（奈良県）の領地の加判奉行^{かはんしやうぎやう}を命ぜられ、その地に引き移って、同領内三か所の山陵御修覆御用掛^{さんりょうごしゆふごようか}り頭取を勤め、慶応二年、その功により朝廷より白銀五枚拝領している。そして、同年四月に津へ帰って、津加判奉行に転じているが、私の父繁男はその前後に祖母の腹に宿ったのであろう。

慶応は父の生まれた三年で終わって明治になった。その明治二年には、祖父は藤堂家の民政會計主事や内務會計主事などという新しい名称の役を仰せつかっているが、父の直話によると、四、五歳のころ、袴^{はかま}をはいて祖父につれられ御殿で殿様にお言葉^{たまわ}を賜ったことがたびたびあるというから、廃藩置県^{はいはんちやう}のあとにも、まだ古風な仕来^{しきた}りは残っていたのであろう。祖父は明治三年に藤堂家の家扶^{かふ}となり、翌四年隠居を願い出て引退している。その四年には父は数え年五歳にすぎなか

初出・底本 わが夢と真実
／昭和三十三年八月 東
京創元社

加判奉行 加判は公文書に判を加える意で、それだけの権限を有する重職。津藩には伊勢、伊賀両国のほかに領地があり、陳就は元治元年（一八六四）、山城国（京都府）と大和国（奈良県）の領地を担当する城和加判奉行を拜命した。奉行所は大和の古市（奈良市）にあった。

藤堂家 慶長十三年（一六〇八）から明治四年（一八七二）の廃藩置県まで十二代にわたって津藩を治めた。藩祖の高虎は近江国（滋賀県）に生まれ、豊臣秀吉に仕えたあと徳川家康に重用された。

った。

祖父の正妻は藤堂家の息女で、文久三年に没している。私の祖母は京都の寺侍の本間氏の娘で、祖父が大和奉行在勤中に娶られたものだが、殿様の息女のを襲うことを遠慮して、当時の仕来りとして妾と名づけられていた。しかし事実は後妻なのである。そういうわけで、父には正妻の腹の兄や姉がたくさんあった。その長男は平井陳常というもので、八代目をついだが、その陳常の孫が平井進といつて、今も津市に在住し、これが私の本家なのである。

その八代陳常の弟に一人のアブレものがあり、隠居している祖父や実兄の家から金品を持ち出して蕩尽したようなこともあって、祖父は財産を失い、父は藤堂家御出入りの豪商の家に預けられて成人した。祖父が没したのは明治十七年、父の数え年十八歳のときである。それから祖母と母一人一人の暮らしとなった。父には一人の弟があつたが、これは津市の商家に養子にやられていた。

父は津市の塾のようなところで初等教育を受けたのだと思うが、向学のころざし強く、苦学を覚悟して、当時大阪に創立された関西法律学校（今の関西大学の前身）に入った。父に去られた祖母は、津市の藤堂家のお寺の食客となり、父の成業を待ったのである。

関西法律学校の三年余の課程を経て卒業したのは明治二十

殿様 陳就は天保五年（一八三四）に家督を相続し、十一代藩主の高猷に仕えた。高猷は文政八年（一八二五）、前年に死去した父の跡を継ぎ、明治四年（一八七二）まで藩主を務めた。

関西法律学校 明治十九年（一八八六）十一月、大阪西区京町堀の願宗寺で開校し、同三十八年（一九〇五）、関西大学に改称。本部は大阪府吹田市にある。

二年の夏であった。第一回の卒業生である。一昨昭和三十年に、関西大学は七十周年の祝典を催したが、そのとき出版せられた「関西大学七十年小史」という写真版の多い冊子には、同大学第一回卒業生の記念写真がのつていて、その十一人の卒業生の中に私の父、平井繁男も並んでいる。

父は大学を卒業しても国に帰らず、勉強をつづけた。学校の助手のようなことをやっていたのかもしれない。また、原稿も書いただろうし、政談演説もやったようである。父は私と違って五尺そこそこの小男であったが、からだに似ぬ声量があり、なかなかの雄弁家だったらしい。

しかし、一人で国に待っている祖母は、父が卒業しても帰ってこないの、淋しさから癪しよくをおぼえ、絶えずその発作がおこるようになったので、父は仕方なく学業を抛なげつて、就職をして祖母と同居する決心をし、同じ三重県の名張町（今は名張市）にあった名賀郡の書記を拝命した。それは卒業後三年を経た明治二十五年のことであったと思う。そして、翌二十六年には妻をめとっている。これも祖母の懇請こんせいによったものであろう。

母は津市在住の同じ藤堂藩士の本当家から迎えられた。藩士といっても、千石取りの私の祖父に比べては微禄びろくの家であったが、母は娘時代に行儀見習いのために、津に近い一身田いしんでんの本願寺ほんがんじの小間遣こまづかいを勤めていた。一身田のお寺は格式が高

記念写真

関西大学公式サイトの「年史編纂室」には「第1回卒業証書授与式（明治22年9月16日）」の写真が掲載されている。<http://www.kansai-u.ac.jp/menshi/story/detail.php?cd=3&nm=1>

今は 底本「今日」を改めた。

一身田の本願寺 真宗高田

派の本山、専修寺（三重県津市）。

く、法主には代々皇族を迎えたもので、その夫人を「お裏さん」と呼び、母はそのお裏さん付きの小間遣いであつた。

お裏さんも名家から嫁したもので、藤堂家の息女なども、たびたびお裏さんに坐つていると思うが、藤堂家の歴史「宗国史」によると、前項「祖先発見記」にしろした平井の祖、於光の項に、「伊豆国平井徳右衛門信友女、母杉本氏也、仕于大通公（高次）、生大享公（高睦）及一身田夫人」とあるから、平井の血統からも一身田ゆかりの人が出ているわけで、偶然にも、母の経歴にはそういう関連があつたのである。

父母の結婚の仲人は津の親戚のもので、写真の見合いをしたという。まだ写真のめずらしいところで、母と母方の祖母は、父の写真の顔に点々として修正のあとがついているのを見て、この人はアバタがあるのではないかと心配したという一つ話もある。

もうあのへんにも汽車は通じていたが、津から名張町へは汽車がなく、母方の祖母は母をつれて山越えをして、歩いたり、馬にのつたりして、婚家へついたという。明治二十六年、父は数え年二十七歳、母は十七歳であつた。母の名は「きく」である。

その翌明治二十七年十月、私が生まれた。場所は前項「ふるさと発見記」に詳しい。

宗国史 津藩の藩政記録。

城代家老の藤堂高文が編纂し、序は宝暦元年（一七五一）。於光は「宗国史外篇」の「外家伝上」に「嬖人平井氏」として記録されている。嬖人は主君のお気に入り。乱歩による引用の一部を讀み下すと「大通公につかえ、大享公および一身田夫人をなす。昭和五十四年（一九七九）、五十六年に上野市古文献刊行会が上下二巻本を刊行。

汽車 明治二十三年（一八

八九）、関西鉄道の三雲（滋賀県湖南市）・柘植（三重県伊賀市）間が開業、同三十年には柘植から上野（現伊賀上野、伊賀市）を経て加茂（京都府木津川市）まで開通した。